

ディキンソンの “I—Years had been—from Home—” について

梶 本 正 美

About Dickinson's poem “I—Years had been—from Home—”

KAJIMOTO Masami

Abstract : In 1869, Emily Dickinson wrote to Higginson that she “did not cross her Father's land to go to any house or town”. Reading her letters and poems, we can easily realize her attachment to “Home”. Poem 609, “I—Years had been—from Home—” has two versions, one written in 1862, the other in 1872. Dickinson's revisions indicate a continuing concern for the theme of this poem.

In this poem, her persona returns “Home” after long years of absence. Although she has returned “Home”, she is afraid to enter for fear of seeing a face she has never seen before. Overcome by the horror of what she imagines she may encounter, she can only flee from the house holding her hands over her ears.

There are some ambiguities which leave the reader puzzled. What is the “Home” in this poem? Does it mean the Kingdom of Heaven, where God exists? What is the “face”? Is it the face of death? Why does she run away in a panic, “like a Thief”?

Johnson says Poem 609 seems pallid, and does not appreciate it. I agree this may not be one of Dickinson's best poems, but by considering the points I have mentioned, I think we can realize Dickinson's deep and earnest awareness of life.

“But I feel that I have not yet made my peace with God. I am still a stranger—to the delightful emotions which fill your heart.” (L-13, To Abiah Root, 8 September 1864)¹⁾ 信仰復興運動の起こるアマーストにあって、Emily Dickinson はすでに10代で、自分が時代の大きな渦から疎外された者であることを意識していた。生涯 nobody であることをしいられ、後半生においては「父の家屋敷」²⁾ からほとんど外に出ることのなかった Dickinson にとって、家は大きな拠り所であったはずである。次の詩は久しぶりでの帰宅を描いている。

I—Years had been—from Home—
And now—before the Door—
I dared not open—lest a face
I never saw before

Stare vacant into mine—
And ask my Business there—
My Business—just a Life I left—
Was such—still dwelling there?

I fumbled at my nerve—
I scanned the Windows o'er—
The Silence—like an Ocean rolled—
And broke against my Ear—

I laughed a Wooden laugh—
That I—could fear a Door—
Who Danger—and the Dead—had faced—
But never shook—before—

I fitted to the Latch—my Hand—

With trembling care—
Lest back the Awful Door should spring—
And leave me—in the Floor—

I moved my finger off, as cautiously as Glass—
And held my Ears—and like a Thief
Stole—gasping—from the House. (P-609, 1862)³

室生犀星の「小景異情」その二の「ふるさとは遠きにありて思うもの」の詩は、「帰るところにあるまじや」という否定の背後にふるさとへの憧憬があふれていて、多くの人の心を捉えて離さない。が実は、東京で作られたものでなく、「それは郷里を離れようとするときの別れの心と、もはや再び帰らぬという決意を歌ったものである」という⁴。Dickinson のこの詩では、やっと帰りついたものの、帰郷は恐怖とともに描かれ、「私」はその場を逃げ去ることとなる。

以前、その解釈に疑問の余地のあると思われる詩についての発表でこの詩を取り上げ、発表後、私が触れなかった第 2 スタンザ 3 行目 “just a Life” について、外国の方から “just a Life” が大事なんだ」とご指摘をいただいた。その点も含めて、多様な読み方が可能だと思われるこの詩について、改めて考えてみたい。

I

609 番の詩には、1862 年の作と 1872 年の作の 2 つの草稿があり、Dickinson がこの主題に深い思い入れがあったことを示している。Emily Dickinson & the Image of Home の著者、Mudge は、Dickinson が 1840 年から 55 年まで住んでいた、本当の家と呼べる Pleasant Street の家から引っ越したことが、この詩が書かれたきっかけであり、10 年後にもうひとつの草稿を残していることは、元の家に戻りたいという気持ちの強さを表していると言っている。

この 2 作には、ダッシュが 62 年作の方に多くみられること、第 1 連の “face” が 72 年作の方では大文字に変更されていること、第 2 連 “vacant, just, dwelling” が、それぞれ “stolid, but, remaining” になど、語句の変更があること、第 3 連、第 4 連が次のように大きく書き直されていること、などの違いがみられる。

I leaned upon the Awe—
I lingered with Before—

The Second like an Ocean rolled
And broke against my ear—rolled

I laughed a crumbling Laugh
That I could fear a Door
Who Consternation compassed
And never winced before. (P-609, 1872)

Mudge はこれらの違いを詳細に検討し、それぞれの詩の背後で、それぞれ別の identity の危機を Dickinson は体験しているのだと言っている。たとえば 62 年作の第 3 連 “I fumbled at my nerve—/ I scanned the Windows o'er—” では、Dickinson はまだ以前の自己を見ることができると考えているのに対して、72 年作の “I leaned upon the Awe—/ I lingered with Before—” は、より抽象的な表現によって、もう帰ることは不可能だという内面のあきらめの気持ちを表していると解釈し、72 年作の方が、Dickinson の感じている危機感のより感じられる作品だとしている⁵。確かに「恐れに寄り掛かり、過去と共にとどまる」というイメージは、「私」の内面の恐怖を鮮明に浮かび上がらせて見事である、がまた 62 年作の「神経をまさぐり、窓をじろじろ見た」は、全体の物語り風の語り口にふさわしく、臨場感を高めているとも思われる。この稿では主に 62 年の草稿を取り上げたい。

引越しがきっかけで創作されたにせよ、この詩は、伝記的事実に重きを置いて読まれるよりも、家が自分を受け入れてくれないのではないかという、不安をまえにしたじろじろ Dickinson の、内面のドラマを描いた作として読まれるべきであろう。詩の大意は、「私」は長年家を離れていて久しぶりに戻ってはみたが、見知らぬ顔が何の用かと尋ねそうで、恐くて中に入ることができない。用は以前の生がまだあるかどうか聞きたいだけなのだが、門に手をかけるものの、戸がさっと開いて床のうえに捨て置かれそうな気がする。結局は、そっと手を離し逃げ去る、というものである。

その意図するところを判断するのに躊躇するいくつかのあいまいな点があると思われる。たとえば “Home” とは何なのか。そこから出てくるかもしれない “face” とはどのようなものなのか。またなぜ「泥棒のように」逃げなければいけないのか。以下研究者の意見を挙げながら考えてみたい。

II

“Never did Amherst look more lovely to me & gratitude rose in my heart to God, for granting me such a safe return to my own dear HOME.” (L-20, To Abiah Root, 17 January, 1848), “Home was always dear to me & dearer still the friends around it, but never did it seem so dear as now. All, all are kind to me but their tones fall strangely on my ear & their countenances meet mine not like home faces, I can assure you, most sincerely.” (L-22, To Austin Dickinson, 17 February 1848) 少女のころから、家は Dickinson にとって安全や平和を保証する場であり、家を離れることに不安を抱いていたことはこれらの手紙にも明らかである。

609 番の詩の“Home”を伝記的事実に基づいて、そのまま家と解釈している研究者は Todd や Mudge などである。家へのこだわりは、彼女の詩作において、様々なものを表現するのに部屋のイメージを用いていることに表れている。“But nature is a stranger yet; / The ones that cite her most / Have never passed her haunted house, (P-1400, 1877) と自然を現したり、“I dwell in Possibility—/ A fairer House than Prose—(P-657, 1862)”とか、“One need not to be a Chamber—to be Haunted—/ One need not be a House—”(P-670, 1863) では人間の意識をたとえ、また天国を“The House of Supposition”(P-696, 1863)と呼ぶなど、印象に残る表現が数多くある。

この詩以前にも天国から締め出されることをうたった、よく知られている“Why—do they shut me out of Heaven?” (P-248, 1861) という詩があることから、609 番の“Home”を天国と解釈することもできる。しかしそうすると、苦勞して辿り着いたものの、再度天国から拒絶されるというか、天国の門の前に立って自ら逃げ帰ったということになる。またキリスト教的な天国であるとすると、戸が開けられないほど、Dickinson が恐れているものとは何なのか、自分が考えていたものとは違った天国とも考えられるが、以前の生がまだあるかと尋ねるためにやってきたという所と考えあわせると、“Home”は天国であると即断するのはためられる。

生涯キリスト教の伝統的な教義に懐疑的で、それでありながら、生涯天国の存在を問いつづけた Dickinson には、彼女なりの追い求めた天国があった。ここでの“Home”はそのような天国、自分の帰るべき所、自分

の理想とする所と解釈できるのではないか。そうすると自分の本当の生がまだありますかと尋ねるのは納得が行くように思われる。

戸を開けることがためられるのは、見知らぬ「顔」が尋ねるかもしれないからであるのだが、「顔」についてはどのように考えることができるだろうか。

Todd は、「私たちは、ドアの背後に何があるのか、背後にある何を『私』は恐れているのか、告げられることはなく、その謎が解かれないうままであるがゆえに、よけいに恐怖は増すように思われる。」と、この詩のもつ複雑さの一端を示しながら、多分「顔」は“the face of death”であろうと述べている⁶⁾。Todd は 72 年の草稿を用いているのだが、62 年の草稿では第 4 連に「危険や死に直面して一度も動揺することはなかったのに」という言葉がみえるので、「死の顔」では矛盾が生じる。ただ Todd が指摘するように、具体的に告げることができないからこそよけいに恐ろしい、「私」自身の内面から生じてくる恐怖である点は賛同できる。

恐怖は門に手をかけた所で頂点に達し、「私」は耳をおおい泥棒のように逃げ去る。「泥棒のように」という表現は、「こそこそと」という意味で、日本語でもよく使われる言い回しであるが、良いニュアンスでは用いられない。なぜ「泥棒のように」逃げなければならなかったのか。「顔」のイメージを解釈する手がかりがここにあるように思われる。

Mudge は、「あたかも以前の生をまんまと盗むのに成功し、作中の『顔』が、『どろぼ〜』と叫ぶのに耳を塞いで、恐怖と罪悪感から逃げるのだ⁷⁾と述べている。この解釈はどうだろうか。Dickinson には、待望の戸の前に立って、あえて中に入らない詩が多い。ここでも入らないからこそ、「私」の逡巡の重さが我々に伝わるのではないだろうか。

Cody は“1 had been hungry, all the Years—”(P-579, 1862)と比較して、home と food は共にエロチックな含みを持っていると指摘し、欲求→部分的充足→不安→放棄と、両詩に共通する性のイメージを読み取っている。興味深くはあるが、シンボル・ハンティングに偏りすぎていて、実りのある読み方とは思えない。その Cody は「泥棒のように」を、立ち入る法的道徳的権利のない所へ入りこんだようにと解釈している⁸⁾。ここでは、物を盗む人間のようにではなく、Cody 説的な権利を奪われた人のように、そこから疎外された人のようにと考えてみたい。

「私」は長い旅路を経て、久しぶりに自分の本来あ

るべき所へ、本当の生があるかどうか尋ねに戻ってくる。しかし内から沸き上がってくる恐怖に押しつぶされそうである。この恐怖は、自分はここに受け入れてもらう資格があるのかという、何かに対する不安というより、生の不安といっても良いものかもしれない。だとすれば、「顔」も自分の思いもかけない自分とすることも可能ではないだろうか。人の心を幽霊屋敷にみたてた 670 番の詩の “Ourself behind ourself, concealed— / Should startle most—” という一節が思い出される。“I lived on Dread—” (P-770, 1863) でも、魂は恐怖に駆られて、絶望に挑むにも等しい所へとおもむくのであるが、609 番とは違って、生の不安を糧にして、言葉を紡ぐ生を生きる覚悟が明確に語られている。“As ’twere a Spur—upon the Soul— / A Fear will urge it where / To go without the Spectre’s aid / Were Challenging Despair.”

609 番では「私」は不安に圧倒され、あてどもなく逃げ去る。Johnson は “pallid rather than spectral” と、この詩を評価していない。

III

Dickinson には彼女なりの追い求めた天国があると前述したが、次に彼女の天国観の一端を見てみたい。

“Heaven”—is what I cannot reach!

The Apple on the Tree—

Provided it do hopeless—hang—

That—“Heaven” is—to Me!

The Color, on the Cruising Cloud—

The interdicted Land—

Behind the Hill—the House behind—

There—Paradise—is found!

Her teasing Purples—Afternoons—

The credulous—decoy—

Enamored—of the Conjuror—

That spurned us—Yesterday! (P-239, 1861)

天国は手の届かないものなのだ、と Dickinson は言うが、直ちにそれは身近なもの、採れそうにない遠くの枝に実っているりんごであり、夕陽だとうたわれる。もしりんごに手が届き、もぎ取れば、楽園を追放されたアダムとイブのように、天国は天国でなくなっ

てしまうと言いたげである。夕陽は丘や家々を鮮やかに染め上げる。西空の夕焼は信じやすい人間に、永遠があるかのように思わせる。夕陽が沈めば暗闇がやってくるにすぎなくて、人間にとっては禁じられた土地、手に入ることはない。人は魔術師の手際に、昨日と同じく今日も、うかうか騙されてしまう。Dickinson は他の詩でも夕陽やオーロラを魔術師にたとえ、その自然のショーに称賛を贈っているが、この詩には、夕ネを明かせば、天国など存在しないのではないかという教会の教えに対する皮肉がある。存在しないから手に入らない天国と、手に入らないから、あるいはあえて手に入れないからこそすばらしい天国と、この詩にふたつの天国を読み取ることができる。

“I went to Heaven—” (P-374, 1862) では、訪れた天国は、聖書にある豪華さとはかけ離れた田舎町で、人々は蛾のようだと揶揄して描かれる。憧れの地に到着した喜びは全く感じられず、詩人の最後の言葉は “Almost—contented— / I—could be— / ’Mong such unique / Society—” である。“‘Heaven’—is what I cannot reach!” では手に入らないと言いながら、楽しげに後者のすばらしい天国を描いて我々を楽しませる。

前述した Cody が、609 番と並べて詳述した 579 番の最後の連 “Nor was I hungry—so I found / That Hunger—was a way / Of Persons outside Windows— / The Entering—takes away—” では、希求しながらも、あえて窓の外に立つことを選び採る詩人の姿勢がうかがえる。入ろうと思えば入れる。その可能性があるからこそ Dickinson は家の外に佇むことを選択するのである。

Wilbur は、“Sumptuous Destitution” の中で “Emily Dickinson never lets us forget for very long that in some respects life gave her short measure; and indeed it is possible to see the greater part of her poetry as an effort to cope with her sense of privation.”¹⁰ と言っている。否定的な側面と背中合わせに、肯定的な意味合いが感じられるのは Dickinson の魅力のひとつであり、手に入らないというマイナス面を逆手に採って、プラスの力に変化させている。“I’m Nobody! Who are you?” (P-288, 1861) で始まる有名な詩でも、nobody というマイナスイメージを “How dreary—to be—Somebody!” と対比させてプラスの意味合いに変えている。そして nobody に徹することの尽きせぬ自信も込めているのである。

IV

最後に “just a Life I left” に関連して、過去の記憶という主題をめぐる詩を挙げてみたい。

The Past is such a curious Creature
To look her in the Face
A Transport may receipt us
Or a Disgrace—

Unarmed if any meet her
I charge him fly
Her faded Ammunition
Might yet reply. (P-1203, 1871)

Remembrance has a Rear and Front—
“Tis something like a House—
It has a Garret also
For Refuse and the Mouse.

Besides the deepest Cellar
That ever Mason laid—
Look to it by it's Fathoms
Ourselves be not pursued— (P-1182, 1871)

1203 番では、過去はもう記憶に薄れたとされているが、油断していると、弾丸のように響きわたり、人に恍惚感や恥辱を蘇らせる奇妙な生きものである。1182 番では、記憶は家で、物置になっている屋根裏部屋もあれば、なにより、用心しなければその深みに墜ちこんでしまう地下室まである。両詩とも戦術をたてなければ対抗できない力を過去に認めている。その他「思い出は、ほこりの積もった聖なるクローゼットで、そのほこりは人を沈黙させる力を持っている」(P-1273, 1873)、「悔恨は目覚めた思い出である」(P-744, 1863)、「根を失ってしまうと、思い出を育てることはできない。一度育ってしまうと、思い出を切り倒すことはできない」(P-1508, 1880) など、Dickinson にとって過去は容易に忘れることのできない関心事であった。Higginson との会見の際にも “Is it oblivion or absorption when things pass from our minds?” (L-342 b) と尋ねている。

成就に見放され、stranger として人生を歩んだ Dickinson が、過去に対して複雑な思いを抱いていたこと

は容易く想像できる。時が流れても、彼女にとって過去は懐かしむ対象とはならず、詩人として戦いを挑むものであった。

Up Life's Hill with my little Bundle
If I prove it steep—
If a Discouragement with [h]old me—
If my newest step

Older feel than the Hope that prompted—
Spotless be from blame
Heart that proposed as Heart that accepted
Homelessness, for Home— (P-1010, 1865)

この詩は、あふれるような詩作の時期を過ぎた頃に書かれたものであるが、それまでの人生を振り返るかのように、人生を小さな包みを抱えて山を登ることに喩えている。たとえ道が険しくとも、挫折が阻もうとも、今日の一步が、人生のはじめに抱いた希望より年老いたと感じたとしても、HomelessnessこそHomeだ、と受け入れた心と同じく、旅を決めた心も責められることなくあれ、というこの詩には、様々な意味で時代の主流から離れ、不安や挫折を経験しながらも、人生は帰るべき所のない旅なのだ、という覚悟と共に生きた Dickinson の姿を見ることが出来る。そしてその旅路に後悔は感じられない。

609 番の第 4 連 “I laughed a Wooden laugh—” が示すように、今までに挙げた 288 番、1010 番、770 番の詩が表している、nobody であること、homeless であること、あるいは恐怖、を踏台にして生きる信念が、それが詩人としてであれ、自分を支えている信念が揺らぐこともある。609 番において、戻るべきでなかった家への帰還が、恐怖の対象として自嘲的に語られる時、Dickinson は自分の過去の生に but を付けざるをえなかったのではないだろうか。それは “but a Life I left” のもつ重みと共に、存在の不安であろうと、Dickinson の生に対する関心の深さをも感じさせるのである。

この “I-Years had been—from Home—” の詩には Dickinson の詩に特徴的な、恍惚と絶望、有限と無限、生と死など、相対立するものの見事な均衡は見られないものの、そのあいまいさや複雑さは、Johnson のいう、ただ青ざめただけの詩ではない厚みをこの詩に与えていると思われる。

注

- 1) Emily Dickinson の手紙は Thomas H. Johnson, ed., *The Letters of Emily Dickinson* 3 vols. (Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University, 1958) からとし、引用文の後に、番号と宛名、日付を付記する。尚、手紙はすべて番号の前にイニシャルの L をつける。
- 2) "I do not cross my Father's ground to any House or town." (L-330, To T. W. Higginson, June 1869)
- 3) Emily Dickinson の詩は、Thomas H. Johnson, ed., *The Poems of Emily Dickinson*, 3 vols. (Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University, 1955) からとし、引用した詩の後に、番号と推定制作年を付記する。尚、詩はすべて、番号の前にイニシャルの P をつけて示す。
- 4) 伊藤清吉著、『現代詩の鑑賞(上)』(新潮文庫, 昭和 27 年) p. 230.
- 5) Jean McClure Mudge, *Emily Dickinson and the Image of Home* (Amherst: The University of Massachusetts Press, 1975), p. 80.
- 6) John Emerson Todd, *Emily Dickinson's Use of the Persona* (The Hague, Paris: Mouton, 1973), p. 81.
- 7) Mudge, pp. 81-82.
- 8) John Cody, *After Great Pain* (Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University, 1971), pp. 129-143.
- 9) Thomas H. Johnson, *Emily Dickinson: An Interpretive Biography* (New York: Atheneum, 1980), p. 137.
- 10) Richard Wilbur, "Sumptuous Destitution" in *Emily Dickinson: A Collection of Critical Essays*, ed. Richard Sewall (Englewood Cliffs, N. J.: Prentice Hall, Inc., 1963), p. 128.